

2018年度 附属中学校「教育相談室」活動報告

青木 真理^{*a}・金成 美恵^{*b}・菅野 江美^{*c}・相模 由紀^{*d}
 蓮實 修一^{*e}・菅野 浩智^{*f}・佐久間康之^{*g}

附属中学校を中心とする「教育相談室」活動に関して、2018年度の活用内容、相談件数と内容などについて報告し、今後の課題を検討する。

〔キーワード〕 教育相談室 スクールカウンセラー 大学附属学校 全員面接
 教育相談組織

I はじめに

福島大学附属四校園では2006年度に、スクールカウンセラー配置をともなう「教育相談室」が設置され、附属中学校を活動母体として運営されてきた。1)2)3)4)5)6)7)8)9)10)11)12)。

スクールカウンセラー配置と「教育相談室」設置の経緯は以下の通りである。

「教育相談室」設置に先立ち、2002年度からスクールカウンセラー（以下SC）が配置された（青木が大学と兼務）。教育相談室設置後、2006年度には非常勤職として金成が6月より雇用され、SCは2名体制となった。金成は附属中学校に加え附属小学校にも勤務している。また、ニーズに応じてSCは附属中学校に隣接する附属幼稚園の保護者の相談に応じるとともに、教諭のコンサルテーションも行う。

本報告は2018年度の「教育相談室」について、附属中学校を中心としたSCの活動、附属中学校の教育相談推進委員会活動等の観点から報告する。執筆の分担は、Ⅱ、Ⅲを主として金成が青木と協議しながら執筆、Ⅳを菅野江美、Ⅴを相模、Ⅵを蓮實が執筆し、そのうえで執筆者全員が議論を行い、青木の責任で全体をまとめた。

Ⅱ スクールカウンセラーの活動状況

1. 活動形態

2006年度より始まった2名体制で13年目の活動となった。例年通り青木が1回4時間で月2回の勤務、金成が1回5時間で週2回勤務を基本形とし、のべ97回の勤務であった。親面接を青木、生徒面接を金成が担当するのが大まかな役割分担だが、様々な条件により臨機応変に対応している。

活動の場はスマイル・ルームと呼ばれる相談室が中心で、教諭と情報共有をする際には教科準備室に赴くこともあった。

関係する教諭とは勤務日誌と共有カルテを回覧し、情報共有をすることになっている。その他月に1回の教

育相談推進委員会も方針の確認や情報共有の場となっている。

2. 来室者数・来室回数・相談内容

来室者数はほぼ例年通りで大きな変化はない。学年別生徒数で1年生が15名と最も多いのは、本年度は1年生の全員面接を入学直後の4月から実施し、フォローアップ面接が増加したためと思われる。

来室者の中で親子で面接を受けているのは14組あるが、半数は親と子どもが別の担当者と面接をする並行面接で、その他7組は親子同席面接や同じ担当者が親と子それぞれに会う親子分離面接である。

表1 2018年度来室者数

来室者数 325名	通常面接 56名	生徒 34名 1年生 15名 2年生 10名 3年生 9名
	全員面接 269名	保護者 22名 1年生, 2年生が対象

※なお一人の生徒が複数の目的で来室する場合があるため、生徒実数とは一致しない。

来室回数を表2に示す。昨年度に比べて教諭の来室が減ったが、それ以外はほぼ平年並みである。全員面接が実施されるようになった2014年以降、SC勤務日（だいたい4時間勤務）は全員面接実施、通常面接3件実施という日程が定例化している。各日の予約はほぼ満席であることから、来室回数はここ数年同じような傾向が続いている。

表2 2018年度来室回数

来室回数		569回
内 訳	生徒	413回
	保護者	88回
	教諭	68回

*a 学校臨床支援センター・附属中学校スクールカウンセラー

*b 附属中学校スクールカウンセラー

*c 附属中学校教諭

*d 附属中学校養護教諭

*e 元附属中学校教諭

*f 附属中学校副校長

*g 福島大学人間発達文化学類教授、附属中学校校長

表3に相談内容と件数（生徒と保護者を併せて集計）を示した。対人関係（友人・家族を含む）と不登校（別室登校含む）は件数としては同数であった。ただし、対人関係（友人・家族を含む）は生徒からの相談が多く、不登校（別室登校を含む）は保護者の相談が多い。これらの相談内容以外には、発達障害、集団不応、学習の悩みがある。

表3 2018年度相談内容

対人関係（友人、家族を含む）	21名
不登校（別室登校含む）	21名
身体症状	9名
学業・進路	4名

※尚、相談内容は複数の項目にわたることから主たる相談を集計した。

Ⅲ 附属中学校の2018年度の活動内容

1. 1年間の計画と経過

<計画>

春休み中に金成が教諭との打ち合わせを行い、1年間のスケジュールを決めた。

まず年度初めの時期に授業参観を行う。カウンセリング等の予定が多くない時期に気になる生徒の様子と集団の様子を観察してアセスメントに活かすことが目的である。また、1年生の授業に関しては、全員面接と連動してアセスメントに活かす。

全員面接は、前半に1年生、後半に2年生とする。

<経過>

4月は全員面接と連動して1年生を中心とした授業参観を行った。

5月は相談ケースが多くなった。

6～7月に、1年生の全員面接後のフォローアップ面接が増えた。また、1年生の不応の表出が増える時期でもあった。学校では適応的に過ごしていても、家庭内で疲れの訴えや怠学的態度の表出などがあった。

夏休み明けも不応のサインがみられた。

10月頃から3年生の進路関係の相談が増えた。また各学年の保護者面接も増えた。

11月は2年生の全員面接が始まり、その後のフォローアップ面接が増えた。2年生は1年生の時に全員面接を経験しているため、それをSCに相談するよい機会ととらえているものが多い印象を受けた。

2. 個別面接①：通常面接（生徒面接）

個別面接の中で、1枠50分程度で実施しているものを通常面接としている。

Ⅱの活動状況で触れたとおり、学年別生徒数で1年生が15名と最も多く、1年生の全員面接を入学直後の4月から実施し、フォローアップ面接が増加したためと思われる。

フォローアップ面接は12名に実施したが、そのうち

7名は生徒自身がかねてからの悩みを全員面接の場でSCに伝えたことで、残りの5名はSCからの促しで、それぞれフォローアップ面接につながった。自分からの悩み相談は概ね2年生であった。2年生は2回目の全員面接で、この場でSCに話せば相談につながるシステムを理解していた。自分の悩みが通常面接で扱う程度の内容か心許ないと話す生徒もいたことから、相談の深刻さをSCに査定してもらいたいという要望もあったものと思われる。よくわからないことでもまずSCに尋ねてみていいのだ、ということは日頃の活動を通して生徒たちに伝えていることであり、それが浸透していると言えるだろう。また1年生時の全員面接での体験がまずはSCに尋ねてみる、という行動につながったのかもしれない。

通常面接の相談内容は、身体症状、家族との関わり、ゲーム依存、発達障害的な問題行動などがあつた。

3. 個別面接②：全員面接

前年の2017年度は5月から9月にかけて3年生対象とする全員面接を行い、文化祭が終わった11月に1年生を対象とする全員面接を行った。2018年度は、前述したように4月から1年生を対象に全員面接を行い、11月から2年生を対象に全員面接を行った。これは、1年生の学校不応傾向を早くつかみ対応するためである。

学年ごとに多かつた面接のテーマは、1年生は“中学生になること”，2年生は“自分への関心”，3年生は“進路との関わりで自己を意識する”であった。特に3年生は、進路決定の時期が迫ってくることで、自分を見つめ、同時に友人や家族との関係のなかで進路を考え始める。それにより自己理解、他者理解が深まり、他者との新たなつながりが確立される。

4. 個別面接：保護者面接

保護者相談は子どもの不登校、別室登校に関するものが多く、そのほか発達障害の疑いに関するもの、生活習慣の未確立に関するものがあつた。

5. 教諭とSCの連携

学年のすべての生徒の全員面接終了後、学年教諭にフィードバックを行った。

またSCが個別相談を行っている不応の生徒に関して、学級担任、学年主任、養護教諭、SC等が集まったのミニカンファレンスを数回開き、情報共有と対応検討を行った。

ほぼ毎月開催される「教育相談推進委員会」も、教諭とSCの重要な連携の場である。これについては、項をあらためて述べる。

これらは顔を合わせての連携であるが、教諭、SC両者の多忙から、誌面での連携も重要であり、それはSC勤務日誌を、SCのコーディネーター役を担当する養護教諭が関係する教諭に確実に回覧することで行い得た。

6. 広報活動

SCのニューズレターは毎月発行し、主幹教諭が印刷配布を行った。また、主幹教諭より他の附属学校園にメール配信してSCだよりを共有した。なお、これまで「SCだより」というタイトルを使っていたが、本年度より「自分研究室 スマイル・ルーム」に変更した。これは、カウンセリングが主体的に自分を考える作業であるということを示す意図のもとに行った変更である。図1に、2018年4月のニューズレターを掲載する。

PTA総会に金成が出席し、保護者にSCについて紹介し、気軽に早めに相談することを求めた。

次年度には、PTA総会以外の保護者の集まりでSCが話す機会を持つことを検討する予定である。

自分研究室 スマイル・ルーム No.1
2018.4.17 福島大学附属中学校スマイル・ルーム

今年度もスマイル・ルーム活動開始しました
始業式、入学式から早くも10日が過ぎました。それぞれが新しい環境に身を置いて、少し緊張感がある時期かと思います。附属中の二名のカウンセラーは毎年同じスマイル・ルームで活動していますが、新年度の始まりはフレッシュな雰囲気の影響を受け、いつもより背筋が伸びているようです。この1年もどうぞよろしくお願いいたします。

青木真理です。
附属中学校でスクールカウンセラーとして活動するのは16年目ですので、なんと、生徒の皆さんが生まれる前から附属中学校にいます。有史以前、ですね。ところで2年前からギターを習っています。とても熱心に練習していて、レパートリーは10曲を超えました。なにかを始めるのに、遅いということはないのだと思っています。

金成美恵です。
私は青木先生に遅れること3年、13年目の活動となります。最近目標としているのは早寝早起きの生活ですが、まだ道半ばです。これができるようになったら自由な時間が増えて、もっと映画をたくさん観たり、挑戦したいと思っています。刺繍ができるのではないかと期待しています。早起き生活が成功している人は、コツを教えてください。

保護者の皆さまへ
本年度「ミニカウンセリング」開始にあたり
附属中学校ではいじめの防止、早期発見を目的とした全員面接を実施して5年目になります。全員面接は校内では「ミニカウンセリング」と呼ばれ、年に2学年分の生徒約280名がカウンセラーと相談室で短時間のカウンセリングを行います。ここでは学校生活の様々な事柄が話題となり、過去実施した生徒たちからも「カウンセリングがどういうものかわかった」や「アドバイスをもらえた」「話してよかった」など肯定的に評価されています。今年度は前期に1年生、後期に2年生全員を対象に、また3年生には希望者を向けに「3年生Day」を設け実施する予定です。お子様の安心感のある学校生活のための一助となることをめざし、活動したいと思います。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

図1 SCニューズレター

7. 附属小学校と中学校の接続

毎年行われている小学校と中学校の引継ぎ連絡会は、本年度は青木が出席し、新入学生の情報を共有した。新1年生は入学直後の4月から全員面接の対象となるため、この会での情報は参考になることが多い。

Ⅳ 小学校での活動

1. 活動の概要と活動データ

2018年度の小学校での活動は20日間で、長期休暇期間を除き、概ね月2回の活動となった。活動内容は面接やコンサルテーション、児童の行動観察が主なもので、1回の活動時間は5時間である。面接人数は児童、

保護者を合わせて29名、面接回数は75回であった。(表4)また全教諭との情報共有の場となる生徒指導委員会へは2回出席した。

表4 2018年度の面接人数と面接回数

面接人数	29名 (児童, 保護者)
面接回数	75回 (児童, 保護者)

2. 面接

本年度の児童面接対象者は4年生以上が多く、一定の言語表現力が身に付いており、面接で経過説明や自分の気持ちを話し整理することが容易にできていた。主訴は友人関係の悩みが最も多い。この種の悩みは面接に至る前に既に担任教諭と話し合いを持っており、自分の課題を理解して面接に臨んでいる。SCとは自分の課題について確認したり、自分の行動を振り返ったり、担任教諭とも日々繰り返されていることと重なるが、SC面接は普段より少し長い期間の振り返りとなり、立場の離れた大人と話を別視点から自分の変化に気付く機会になることを期待している。

保護者からの相談は、家庭での関わり方についての悩みが多い。SCから助言や情報提供をするが、担任教諭など学校と連携を取ることでより効果的な関わりが持てるケースもある。保護者の要望がある場合は、SCが橋渡し役となり連携体制が強化できるよう動くこともあった。

3. コンサルテーション

2018年度は教育相談係が新設され、毎回の活動終了時に活動報告会を統括した。出席者は校長、副校長、主幹教諭、教務主任、教育相談係、養護教諭、少人数支援室担当者、SCである。可能であれば関係する担任教諭や学年主任も同席し、出席者それぞれの視点から児童に関する情報を共有する時間をもった。同時に今後の関わりの方針について話し合い、それぞれの役割を明確に確認し、次回その間の実践と働きかけによる変化の確認、という繰り返しが行われた。こうした機会を持つことで児童に直接かかわる教諭から管理職まで同時に同じ情報を共有することができ、何か動きがあった際に組織的に素早く対応しやすくなると思われる。

少人数支援室担当者はSC活動の際に事前に児童情報をまとめ、活動の効率化を図った。またSC面接後の児童を参与観察したり、担任と連携を取り直接児童のサポートに入ったりするなど、タイムリーできめの細かい支援活動をしている。

4. 着任教諭面接

着任教諭の面接は5年目となり、業務的な顔合わせを兼ねて、教諭の心身の健康状態やメンタルヘルスに関する情報を伝える機会としている。今年度は7名が対象であった。5年前の企画開始当初から、面接内容

に関して管理職への報告をしないルールを設けており、慣れない新しい職場で勤務する教諭たちが自由に話ができるよう配慮されている。

V 幼稚園での活動

幼稚園での保護者面接は、本年度は3回あった。いずれも隣接する中学校で実施した。

VI 教育相談推進委員会

1. 組織

全校の教育相談活動を包括的に推進する目的で2005年度から発足した委員会である。メンバーは委員長(菅野)、各学年より1名ずつの委員、校長、副校長、主幹教諭、養護教諭、SC 2名である。

2. 会合とその内容

会合は原則として月1回、第2週木曜日のSCの出動日にあわせて開催した。内容は、カウンセリングを行っている生徒・保護者、また相談室を時折訪問している、もしくは以前に相談室を訪問していた生徒について、情報交換や今後の対応についての協議を行った。

会は各学年からの報告、SCによる報告と助言、SCとの協議の順で概ね行われた。

会での話し合いの内容は、各学年の担当教諭が各学年のスタッフや担任に伝え、共通理解を図った。

3. 成果と課題

本年度の成果は、情報交換だけで終わらなかった点である。学年としてどのように対応したいのかをSCに相談し、今後の方策を話し合い、翌月に成果を確認し、また取り組んでいくというサイクルで会を運営できたことである。また回覧されるカウンセラー勤務日誌に学級担任が生徒の様子を記録するだけでなく、対応や支援についてSCに助言を求めたいことを記入することで、生徒・保護者の様子から、学級担任の困っていることを相談できる場になったことである。

課題は、生徒指導と教育相談で重複している生徒もいるので、より効果的な指導を行うために、いかに生徒指導委員会等と連携を図るかである。また、昨年度よりも短縮されたが、それでも該当生徒が増加傾向にある等、情報交換するだけでも、会議時間が長時間になってしまっている。会議の終了時間を明確にして行うことや、事前に資料を委員に配ることで、前もって目を通せるようにする等の時間短縮の工夫が必要である。

(菅野江美)

VII 保健室との連携

今年度の保健室とSCとの連携として、予約管理と学級担任との仲介役、情報交換、学習支援員の活用があげられる。

予約管理については、特にミニカウンセリングが滞りなく行えるよう、行事確認を注意して行った。なお、

カウンセラー勤務日誌の回覧方法には、前年度同様の課題が残ったため、2019年度からは新たな試みとして、校内ネットワークの生徒指導記録を活用した回覧方法を実施している。

情報交換については、特に支援が必要な生徒のケース会議を設けることもあった。教育相談推進委員会とは別に、SC、担任、学年主任、養護教諭が集まり行った。それぞれの役割分担や方針を確認することは有効だったと思われる。

学習支援員については、学習支援員の勤務が始まって4年目を迎えたが、今年度は別室登校の生徒がほとんどいない状態が夏休み前まで続いた。前年度の反省で、支援対象がない日の活動内容について検討することが挙げられていたことから、本年度は、保健室に来室した生徒の話を聴いてもらったり、メッセージカードの作成を行ったりした。保健室に来室する生徒の中には、人間関係をうまく築けない生徒もいる。そのような生徒の話を聴くことは、学生自身の学びにも繋がったのではないかと思われる。

また、メッセージカードは『The Angel's Message』という本の中から、支援員自身が選んだメッセージをカードにしたものである。来室した生徒の目に留まる場所に飾ることで、悩みの軽減や解決のヒント、自分自身を振り返るきっかけになればよいと思い、飾ることにした。

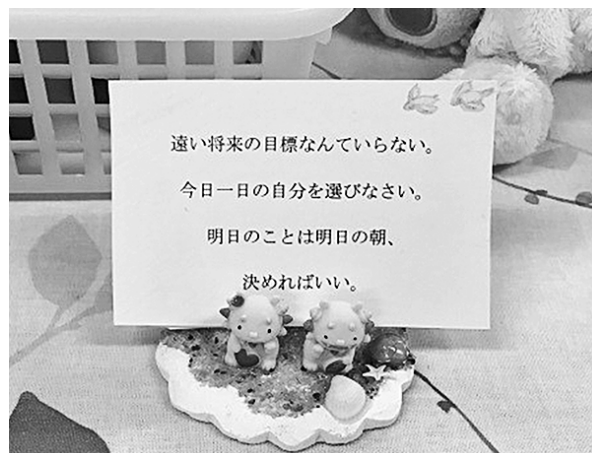


図2 メッセージカード

不登校が始まる時期として、夏休み明けが挙げられる。今年度も夏休み明けから不登校になる1年生が多くみられた。進級時のクラス替えをきっかけに教室復帰を目指す上でも、学習の遅れは避ける必要があった。夏休み明けからは学習支援員の勤務がなかったため、学年教師が空き時間に個別指導を行ったが、学習支援員の採用は今後も検討してもらいたい。

(相模由紀)

VIII 主幹教諭より

本校では2002年度よりSCが配置されている。また

2006年度には2名体制となり、各々の役割をいかして効果的に機能している。SCが学校の教職員として生徒に認知されている。中でも本校での特徴的な運用として挙げられるのは、以下の点である。

1点目は、SCの役割分担についてである。そもそもSCが2名いることで、純粋にカウンセリングに多く時間をかけることができる。さらに1つの課題に対し2人が役割を分担しながら関わることができる。例えば勤務日が多く、生徒と接触しやすい金成SCが生徒対応、その保護者との面談を青木SCが行い、その結果と今後の方針を共有する、といったことができる。それによって課題を客観的かつ多角的に分析し対応している。

2点目は、附属小学校からの情報がSCを通して繋がっていることである。SCの内、金成SCは附属小学校でもカウンセラーとして勤務している。もちろん小中連携の一環として、教師間の情報交換は行っているが、直に児童を見てきたSCが中学校に勤務しているというのは、大きな強みである。特に課題が発生した時に得られるSCからの家庭環境や過去（小学校）の対応などは、担任などの担当者にとって極めて重要な情報になる。また、青木SCには中学校入学直前に保護者を対象とした相談会を実施していただき、入学前に不安を抱えた生徒の問題解決に役立っている。

3点目は、保護者へのSCの紹介である。4月に開催される第1回PTA総会でSCによる講話を実施している。SCの活動紹介やカウンセリングによって抽出される最近の子どもの傾向、保護者に対する子育て上の助言などの話をしてもらっている。この講話を実施することで、新入生の保護者にもSCの顔と名前を覚えてもらい、その後のカウンセリングをスムーズに進める効果がある。

4点目は、全員面接の実施である。中学校に在籍する3年間に2度、全員面接を実施している。例年は入学直後の1学年と進路決定を控えた3学年を対象として実施してきた。今年度は、従来通りに1学年と、友人関係に変化が表れて心が不安定になりやすい2学年（11月～3月）で個別面談を実施した。1学年で全員に面談をすることで、特に附属小以外の公立小学校出身の生徒に対して「学校で悩みがあればSCが相談にのってくれる、アドバイスがもらえる」という安心感を与えていると思われる。また2学年後半から3学年で発生する友人関係や勉強、進路に対する不安や悩みは深刻でかつ卒業まで解決しにくい問題であることが多い。このタイミングで面談を行うことで、生徒の悩みが大きくなり学校生活や学習に影響が出る前に継続的に対処することができる。

一方で課題もある。1つは、学校不適應の生徒の増加とその対処に関する課題である。社会の大きな流れでもあるが、本校でも不登校など学校不適應の生徒の

数が増加傾向にある。附属小学校には「ほっとルーム」と呼ばれる不適應児童への支援教室がありスタッフも常駐しているが、附属中学校にはそのような部屋も体制もない。附属小学校で「ほっとルーム」で支援を受けてきた子どもにとって、附属中学校での生活はハードルが高いものと想像される。「ほっとルーム」の代替として保健室で学校不適應の生徒を受け入れているが、受け入れる部屋の広さや機能に限界が生じている。本校は空き教室に余裕がないが、この対応は喫緊の課題である。

2点目は、情報連携の範囲とスピードについてである。本校ではSCは勤務日誌をつけ、それを教諭間で回覧している。管理職と生徒指導主事や養護教諭の他に、カウンセリングを行った生徒の担任に回覧しており、プライバシー保護の観点から、原則としてそれ以外の教師へ情報開示はしていない。しかし生徒の状況によっては、学年主任や部活動の顧問など情報開示の範囲を広げたり、対応の緊急性を高めたりする事案もある。現在の回覧の運用ではこういった個別の事情に対応できないことがある。本校では校務支援システムを導入しており、これらのICTも活用しながら改善していくことが期待される。

3点目は、カウンセリングの予約の問題である。幸いにもSCとその活動が認知されて、気軽にSCに相談したいと考える生徒や保護者がいる反面、急な相談をしたいと希望してもSCの予定がいっぱいになっており、予約が1ヶ月後という事態も発生している。勤務日や時間の再考、人員配置など、現状を踏まえて見直しが必要な時期がきていると考えている。

課題もあるが、本校でのSCに関わる取組は概して効果的であるし、生徒や保護者もSCを相談の窓口として頼りにしていると感じている。これからも私たち教諭がSCの重要性を改めて認識し、これまで以上に効果的に活用して、生徒の心身の健康に資することができるようにしていきたい。

(蓮實修一)

Ⅸ まとめ

2018（平成30）年度の附属中学校「教育相談室」、SCの活動についてまとめて報告した。

2018年度の特徴は、まずは、5年目に入った全員面接を行ったことと、1年生への実施を入学間もないころに行ったことである。このことで1年生の早い段階での不適應傾向をつかみ、1学年教諭との情報共有により見守る体制をつくり、SCの個別面接につなげることができた。ただそれでも年度の中ごろに1年生の中に不適應を顕在化させる生徒が出現した。1年生に対するより丁寧な観察、より緊密で素早いSCと教諭の連携が必要と思われる。また、2年生への全員面接は、1年生のときの経験を経て、SCに相談する準備

性が整い、躊躇せず悩みを話すことができたケースが複数見られた。そのうちのいくつかは、フォローアップ面接につなげ、問題の早期解決もしくは生徒の自主的な「自分探究」に寄与することができた。3年生の全員面接を行う時間を捻出できなかったため、3年生については、全員面接希望期間を設定して、相談に応じた。

第2に、例年通り、附属小学校と附属中学校の教育相談上の緊密な連携を図ったことである。両校に同じSCが勤務している条件をメリットとして、適応に課題のある児童生徒が中学校でよいスタートを切ることができるように、保護者の事前相談会、附属中学校の教諭への情報提供、附属小学校と中学校の引継ぎ連絡会へのSCの出席など、さまざまな工夫を図った。

第3に、年度スタート前の春休みにSCと教諭が話し合い、1年生の全員面接実施時期を早める件も含めて1年間の計画を話し合ったことが挙げられる。前年度の振り返りと1年間の見通しを共有することができた。今後ともなるべくこの話し合いを行っていきたい。

今後の課題であるが、SCの人員配置を挙げたい。Ⅶで蓮實が「幸いにもSCとその活動が認知されて、気軽にSCに相談したいと考える生徒や保護者がいる反面、急な相談をしたいと希望してもSCの予定がいっぱいになっており、予約が1ヶ月後という事態も発生している。勤務日や時間の再考、人員配置など、現状を踏まえて見直しが必要な時期がきていると考えている」と述べているように、SCの勤務時間を延長する必要性が生じている。ところで文部科学省が提唱する「チーム学校」構想では、SCの常勤化に言及されているが、福島県の公立学校にはまだ常勤SCは配置されていない。公立学校に先駆けて附属学校園に常勤SCを配置すれば、常勤SCの働き方、常勤SCを配置したうえでの教育支援活動のありかたのモデル提示を行うことができる。附属学校での相談ニーズの増加と、常勤SCモデル校としての発信、この2点から、附属学校園に常勤SCを配置することを大学当局に検討してもらいたいと考える。

引用文献

- 1) 青木真理, 佐藤文子, 石井博行, 君島勇吉「平成14・15年度 附属中学校カウンセリング・ルーム活動報告」福島大学教育実践紀要第47号 pp63-66 2004
- 2) 青木真理, 渡部由美, 佐藤敏宏, 石井博行, 君島勇吉「平成16・17年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 創刊号 pp115-118 2006
- 3) 青木真理, 金成美恵, 渡部由美, 遠藤博晃, 天形 健, 君島勇吉「平成18年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 第3号pp109-112 2007
- 4) 青木真理, 金成美恵, 渡部由美, 橋本浩幸, 天形 健, 島 義一「平成19年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 第5号 pp97-100 2008
- 5) 青木真理, 金成美恵, 安藤久美子, 安田雄生, 天形健, 島義一「平成20年度附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第7号pp81-85 2009
- 6) 青木真理, 金成美恵, 樋上 聖, 二瓶久美子, 島 義一, 白石 豊「平成21年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第9号 pp49-53 2010
- 7) 青木真理, 金成美恵, 樋上 聖, 根本光二, 菅野重徳, 小針伸一, 白石 豊「平成22年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第11号 pp93-97 2011
- 8) 青木真理, 金成美恵, 鶴巻厚保, 根本光二, 小林修, 小針伸一, 白石 豊「平成23年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第13号 pp65-69 2012
- 9) 青木真理, 金成美恵, 小寺真紀, 嶺岸知弘, 小針伸一, 嶋津武仁「平成24年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第15号 pp101-106 2013
- 10) 青木真理, 金成美恵, 加藤梓, 宮崎映理子, 嶺岸知弘, 大越一也, 嶋津武仁「平成25年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第15号 pp53-58 2014
- 11) 青木真理, 金成美恵, 加藤梓, 宮崎映理子, 高萩雅人, 大越一也, 嶋津武仁「福島大学附属中学校の教育相談室活動について～スクールカウンセラーによる全員面接の試みに焦点づけて～」福島大学総合教育研究センター紀要第20号 pp37-44 2016
- 12) 青木真理, 金成美恵, 野地恵美子, 相模由紀, 村上淳, 大越一也, 川本和久「平成27年度 附属中学校『教育相談室』活動報告～2年目の全員面接に焦点をあてて～」福島大学総合教育研究センター紀要第22号 pp39-44 2017
- 13) 青木真理, 金成美恵, 野地恵美子, 相模由紀, 澤藤晃治, 大越一也, 川本和久「平成28年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第24号 pp63-70 2018
- 14) 青木真理, 金成美恵, 野地恵美子, 相模由紀, 菅野浩智, 川本和久「平成29年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第26号 pp47-52 2019